牛若の强盗退治　附りその遺跡

――熊坂長範と藤澤入道とは同一人か――

沼波守

熊坂長範といふ强盗の張本が、吉次信高の財物を奪はうと、吉次の旅宿に討入つて、吉次に同行してゐたまだ年少の牛若丸に討たれたといふ事は、謡曲「烏帽子折」及び「熊坂」によつて世人によく知られて居る。ところが「義經記」では、强盗の張本が熊坂長範ではなくて、藤澤入道となつてゐる。

「義經記」巻二の一、「鏡の宿にて吉次宿に强盗入る事」の章に、吉次が鏡の宿の長の許に宿つた夜、その年は世の中が饑饉であつたので、出羽國の由利太郎、越後國頸城郡の住人藤澤入道二人が大將となつて、宗徒の者二十五人、その勢七十人連れて、諸所で强盗を働きながら京をめざして上つて來たのが、吉次が鏡の宿の長の許に宿つた同じ夜、長の隣に宿つた。

由利の太郎、藤澤に申しけるは、「都に聞えたる吉次といふ金商人（かねあきうど）、奥州（おうしう）へ下るとて、多くの賣物を持ち、今宵長者のもとに宿りたり。いかゞすべき。」といひければ、藤澤の入道、「順風に帆をあげ、棹さし押寄せて、しやつが商物（あきなひもの）とりて、わが黨どもに、酒飲ませて通れ。」

といふことになつて屈強の足輕五六人に腹卷着せ、「油さしたる車松明」、五六臺に火をつけて、四邊を照らして長の許に討入つた。

その夜由利太郎は

唐葡黃の直垂に、葡黃縅の腰卷著て、折烏帽子に打ちかけして、三尺五寸の太刀

を佩き、藤澤入道は

褐の直垂に、黑革縅の鎧著て、兜の緒をしめ、黑塗の太刀に、熊の革の尻鞘入れ、大薙刀を杖につき

といふ扮裝である。ところがまづ由利太郎が、僅かに十六歲の牛若に、苦もなく首を打落された。

藤澤入道は、これを見て、「あゝ斬つたり、其處をひくな。」とて、大長刀打ちふりて、走りかゝる。これにかかり合ひて、散々に斬りあひ給ふ。藤澤入道、長刀を莖長に取りて、するりとさし出す。走りかゝり給ふ。太刀は聞ゆる劍なれば、長刀の柄つんと切りてぞ落されけり。軈て太刀を拔かんとしけるを、拔きも果てさせず切り付け給へば、兜の眞向、しや面かけて、切り付け給ひけり。

と入道も討たれた。時に承安二年二月四日の事だといふのである。ついでに、「義經記」卷一の一、「義朝都落ちの事」に、平治元年（一一五九）牛若當歲とある。それならば承安二年（一一七二）には十四歲の筈であるが、十六歲とある。最斯樣な矛盾は「義經記」には諸所にある事ではあるが。

その遺蹟について「木曾路名所圖會」（文化元年、一八〇四。成）一乾に

牛若丸投宿家　鏡宿左方にあり、澤氏といふ。屋の棟に幣を立つるなり。昔牛若丸東へ下り給ひし時、こゝ

に止宿し給ふ。夜半の頃、强盗入りければ、牛若丸ことごとく退治し給ふとなん。謠曲には赤坂の宿として熊坂長範とす。又義經記には此宿とす。今に此里の神事には神主來りて祓をなし、屋の棟に幣を立てゝ歸るとなり。

とあり、挿繪もある。その繪は、向ふに鏡山があり、その左に月が出てゐる。前景は街道で、兩側に家並がありその手前の側の右端に「牛若丸一宿家」と註した棟に幣の立てゝある家があり、左に家並を出外れた所に鏡清水といふのがある。記事に「左側」とあるのは、京から下つての左側である。ところが新井白蛾の「牛馬問」(寶暦五年、一七五五)卷三に

予美濃路へ下りしに、鏡が宿にさらに其舊跡なし

とある。名所圖會の澤氏の家といふのは、其れ以後に出來た名所か、それとも白蛾の云ふのは牛若丸の舊蹟はあるが、熊坂の舊蹟はないといふ意味であるかもしれない。

「名所圖會」にもあるやうに、謠曲「熊坂」では、强盗の張本は「義經記」のやうに由利太郎ではなく、熊坂長範一人となつてゐて、場所も、京都からでは、鏡宿から約十五里先の美濃の國赤坂となつてゐる。東國修行の僧が長範の塚に廻向して、長範の亡靈からその夜の有樣を聞くといふ趣向である。前にも記したやうに、「義經記」では、長範等は偶然吉次の宿の軒並びに宿つて、吉次の事を知つて、襲ふといふのであるが、謠曲「熊坂」では、最初から吉次の財物を覗つて、

吉次が通る道すがら、野にも山にも宿泊りに、目附を附けてこれを見す。

といふ有樣であつたのが、いよ〳〵赤坂で夜襲といふ事になつたのである。そして强盜達も、「義經記」の鏡の宿では、せんとうの大將に出羽國の由利の太郎と、越後國に名を得たる頸城郡の住人藤澤入道との二人を語らひ信濃國のさんの權正の子息太郎、遠江の蒲の與一、駿河國の興津の十郎、上野國の豊岡の源八以下、「いづれも聞ゆる盜人、宗徒のもの二十五人、その勢七十人」打連て押廻つたのであるが、鏡の宿で長の家に押入つたのは、由利の太郎と藤澤の入道との二人が、屈强の足輕ども五六人に腹卷著せて連れたのであつた。ところが謠曲「熊坂」では、「義經記」に見えた者は一人もなく、河内の覺紹、磨針太郎兄弟、都の者では三條の衞門、壬生の小猿、越前の淺生の松若、三國の九郎、加賀國（義經記では越後國）の熊坂長範で、手下は七十人、赤坂の宿で吉次の宿所に討入つたのであるが、手下の者は、牛若の爲に十三人同じ枕に切伏せられ、其の他の者は手を負つたり、具足を奪はれて逃げ散つて了つたので、張本の熊坂長範が長刀を振つて牛若に立向つたが、熊坂が

追つ懸け透かさずこむ長刀に、ひらりと乘れば刄向になし、しさつて引けば馬手へ越すを、おつ取り直して丁と切れば、中にて結ぶをほどく手に、卻つて拂へば飛びあがつて、そのまゝ形も失せて、こゝやかしこと尋ぬる處に、思ひもよらぬうしろより、具足の透間を

ちゃうと斬られ、怒つた熊坂が長刀投捨て手取りにしようと狂つたが、次第々々に重手を負つて、遂に松の根元で落命したといふのである。餘談ではあるが、「義經記」に、出羽の國の由利の太郎とあるのは、「和名抄」に、飽海郡由理鄕の名が見えてゐる。今の羽後國（秋田縣）由利郡の内の地である。多分其處の人であるので、由利の太郎と呼ばれたのであらう。

さて以上の二つでは、熊坂退治が共に牛若丸時代の事で、義經の元服以前の事であるが、同じ謡曲でも「烏帽子折」では、元服以後の事になつてゐる。牛若が鏡の宿に宿つた時に、都から早打が來て牛若を探してゐると知つたので、牛若は宿の烏帽子折に烏帽子を折らせて元服した。この烏帽子折の妻が鎌田正清の妹で、牛若を見て懐しがる。――「義經記」では、牛若は熱田の大宮司の許で元服する事になつて居る。――さて元服した牛若は旅を續けて、赤坂に宿つた時に熊坂に襲はれる事は、謡曲「熊坂」と同じであるが、「熊坂」に見えてゐる盗人でこれにも見えてゐるのは、長範と摺針太郎兄弟とだけ、あとは「熊坂」にたかつた高瀬の四郎といふ名が見えてゐる。「熊坂」では牛若は十六七の（「義經記」では十六歳）小男となつてゐたが、これでは十二三許りなる幼き者とあつて、承安二年の事とすれば、此の方が實に近い。

さて强盗どもは押入つたが、眞先に切入つた摺針太郎兄弟は牛若にたゞ一打で細首を打落される。これを見た高間の四郎は、手勢七十騎を連れて退いて了ふ。その上に松火の占手も悪いと聞いて、長範も一旦はそのまゝ引返さうと思つたが、思ひ返して手勢を引連れて、

熊坂の長範六十三、今宵最後の夜討せんと鐵履踏ん脱ぎ捨て、五尺三寸の大太刀を、するりと拔いて打ちかたげて切入つた。「義經記」の藤澤入道も、謡曲「熊坂」の長範も共に長刀であつたのが、これでは大太刀となつて居る。ところが牛若に切立てられて、

打物業にて叶ふまじ、組んで力の勝負をせんとて、太刀投げ捨てゝ、大手を廣げて飛んでかゝるを、背けて諸

膝薙ぎ給へば、切られてかつぱと轉びけるが、起き上らんととつっ立つ所を、眞向より割りつけられて、一人と見えつる熊坂の長範も、二つになつてぞ失せにける。

といふ事になつて了つたのである。

舞曲「烏帽子折」は謠曲の「烏帽子折」と殆んど同巧ではあるが、それよりも複雜な趣向であり、誇張が甚しい。牛若は鏡の宿で、重代の太刀を烏帽子親として元服して九郎義經と名乘つた。吉次が襲はれた所は、赤坂の手前で青墓の長の許である。青墓の長は義朝の妾で萬壽の姫といふ娘がある。（「平治物語」では、青墓の長者大炊の娘延壽が義朝の寵を受け、その間に出來た娘が夜叉御前だとある。）長は一間四面の光堂を建てゝ、義朝、義平、朝長を祀つて居る。その靈前に禮拜した義經は、父兄の夢の告で、其夜の難を豫知してゐた。

さて盜人達は、越後と信濃の境なる熊坂の長範親子六人、ざす善光寺南大門のねばからひ（居計らひデ軍師ト云フ意味デモアラウカ）の右馬丞、ごちゃうの與次、さいくちの七郎、はったの刑部、かひつかみ（かいつかみデ搔摑ノ意カ）の鷲次郎、けら次郎、田樂が崔の狐三郎、鯽次郎、ふじに坂東次、坂東內、伊豆のお山のやけじたの小六等の頭株七十餘人、手下三百人、總勢三百七十餘人と人數が大分に殖えてゐる。眞先に進んだ熊坂太郎はすぐ義經に首を打落され、八十三人が矢庭に斬伏せられた。六尺三寸の大長刀を振つて立向つた長範に、義經は鞍馬で天狗に學んだ霧の法を打ちかけ、我身には小鷹の法をかけて、ちゃうと斬ると、長範は眞向から二つになつた。といふのである。

長範の出生地が、謠曲「烏帽子折」ではハツキリしてゐない。たゞ「このあたりの惡黨共」とあるだけである

から、美濃國の人だといふのかもしれない。（生國がハッキリしない代りに、長範の年齢を六十三と明記してあるのはこの曲だけである。）謡曲「熊坂」では加賀國とある。加賀國（石川縣）江沼郡三木村の大字に熊坂といふ所がある。大聖寺の南で越前國（福井縣）との國境から餘り遠くない所である。こゝの峠に熊坂長範の木像を祀つた堂があるといふ事が、泉鏡花氏の書いたものにあつたと覺えてゐるが、何にあつたかは、今手許に全集がないので明記しかねる。舞曲「烏帽子折」では、「越後と信濃の境なる」とある。信濃國（長野縣）上水内郡信濃尻村の大字に熊坂がある。野尻湖の北、關川の南岸で、越後（新潟縣）との國境に極く近い所で、附近に長範山といふのもある。

さて長範（實在の人物か架空の人物であるかは知らないが）の名乘る熊坂が、もし加賀國でなくて、「越後と信濃の境なる」の方の熊坂だとすれば、「義經記」の「越後の國に名を得たる頸城郡の住人藤澤入道」といふ記事をこゝで顧みてみたくなる。この藤澤は中頸城郡中郷村の内で、熊坂から直徑で五六百北にあたる所である。熊坂は今は信濃國（長野縣）に屬してゐるが、地勢からいへば、越後中頸城郡に屬すべき地であるとは、吉田東伍博士の意見である。かういふ事を考へてみると、熊坂の某が入道して藤澤に住し、藤澤の入道と呼ばれたかも知れないし、逆に、藤澤の入道長範が、熊坂の長範とも呼ばれることもあり得るとも考へられる。長範の名を音讀するのも、何とやら入道臭いし、後世の畫でみる長範も、薙刀を持つて居るせゐか、武藏坊辨慶じみた扮裝であるのは、實際に長範が入道であつた事が、能樂等を通して傳はつたのかも知れない。

とにかく、「義經記」で藤澤の入道と傳へたのに、謡曲で熊坂の長範となつたのは、何か理由がなければなる

まい。けれども私の想像のやうに、同一の人物が別の名で呼ばれてゐたのだとすれば、それ〴〵の作が傳聞の儘に、別々の名で傳へたといふ事は、ありさうな事である。島津久基博士によると、藤澤の入道と熊坂の長範とを同一人とした「藤澤入道熊坂傳記」といふ黄表紙があるさうであるが、私には未見の書であるから、どういふ理由で同一人となつてゐるかがわからないのが、甚だ殘念である。

遺蹟については、藤澤入道の方はあまり聞かないが、長範の方には大分ある。益軒の「岐會路記」（貞享二年の旅行）の下に

青墓の西に青野村あり。其西は青野が原也。名所也。古歌有り。熊坂の長範が物見の松とて大なる松有り。赤坂よりゆけば南にみゆ。大垣より行けば北にみゆる。

とある。前に引いた「牛馬問」に

一とせ赤坂の驛に一宿し、熊坂が事を古老に問ひしに、此宿の中比に、熊坂が舊宅と傳ふ家あり。又物見の松は垂井川より中仙道のうちにして、青墓は木會路なり。

とある。「木會路名所圖會」卷二に、青野が原左の方半町許に幣懸松といふのがあり、青野の一本松ともいふとあつて、

傳に云く、朱雀帝の御宇東夷平將門退治の時、中山金山彦太神に祓ひまし〳〵て幣掛松の名を賞せり。然るを世人熊坂長範といふ夙賊此のほとりに住んで徒黨を集め、旅客を襲ひ、此松より遠見せし迚、土人熊坂物見松といふ。古代の松は正德年中大風に倒れ、今存するは植繼の松なり。

とある。卽名所圖會にいふ世人の說では、熊坂長範は赤坂に住んでゐたといふので、謠曲「烏帽子折」の系統である。しかしこれは、一時赤坂に住んで强盜を働いてゐたのだといふ意味にとれば、熊坂とよばれたのはその出生地（加賀にしろ、越後にしろ）からきたとするのに衝突はしないであらう。

ところで、「木曾路合所圖會」の青墓の里の畫には、近景は街道で、街道に添つて圓願寺といふ草庵があり、左横に義朝・義平・朝長の墓や源義經芦竹といふものがある。圓願寺の背後の山際に朝長墓・長者屋敷が見えてゐる。これは畫の右の方の半分で、左方には圓願寺の斜前方の民家の裏に照手の松があり、霞を隔てて、上の方が青野村・青野が原で、長範物見の松がある。更にその上方の霞の上に、左に大垣道があり、その右相川の畔に熊坂塚といふ小堂、更に霞を隔てて、上に垂井が描かれてゐる。「東海木曾兩道中懷寶圖鑑」（天保十三年、一八四二）にも垂井のところに、熊坂物見松、圓願寺、義朝の墓、長者屋敷の址が見えてゐる。いかに長範が有名であつたかがわかる。「木曾路名所圖會」に描かれて居る長範物見の松は、青野への街道の松並木らしい間に、村の入口と覺しき所に、一段高く塚を築いた上にある大きな松で、この邊に關係のないやうに思はれる照手の松などといふ物のあるところからみても、一里塚の松を、好事家が長範物見の松と傳へたのぢやないかと思はれる。

平井塘雨の「笈埃隨筆」（安永から天明までの實地見聞集）の卷九に、長範が紀州高野山の僧坊を掠めたが、大師の廟前で忽然悔悟し、奪ひ取つた財物を返し、自らの齒を打缺いて、

高野山峰の嵐ははげしくもこのはを殘せ後のかたみに

と詠じた歌を、自書して殘しておいた。との記事がある。長範も風雅の嗜の侮り難いものがあつた事になるが、

瀧澤馬琴の「燕石雜志」（文化七年、一八一〇）卷二の（一）「古歌の訛」に、この話は「新著聞集」に出てゐるとし、（歌は「峰の嵐ははげしくと。」となつて居る）これは「室町殿物語」に普光院殿が高野詣の時、自ら齒を落して骨堂へ納められた時に、

高野山おろす嵐のはげしくとこのはは殘れ後の世までも

とあるのを訛傳したのであらうと云つてゐる。思ふに訛傳といふよりは、評判の長範をかりて、大師の靈驗を宣揚しようとしたのであらう。

長範の評判は、とんでもない古蹟までも出來てきた。天野信景の「鹽尻」八十六卷に

此里（尾張國愛知郡八事庄島田村）に古甁といふ所あり、野翁の說熊坂長範住せし處、海道の馬を盜みつなぎし所也といふ。其地に地藏堂あり、是を毛替の地藏と呼ぶ。長範白馬を盜み來ればやがて黑馬と變じ、凡そ馬の毛色を異にしける地藏也といふ。されば此地藏盜人に與せしにや、一笑。また其東平針村に長範が馬場といふ所あり。美濃國赤坂にこそ熊坂が物見の松及びぬすみし馬を藏せしとて洞もありとかや。此事は世にあまねく知り侍らず、如何なる盜人をいひあやまり侍る、しらず。

とあつて、流石の博學天野信景も、とんでもない古蹟には呆れてゐるが、これ亦熊坂長範の著名であつた一證にはなる。「此事は世にあまねく知り侍らず。」とあるのは、尾張にある長範の古蹟の話を知らないとの意味であらうが、赤坂に馬を隱しておいた洞窟があるといふのでは、長範は馬盜人であり、赤坂には相當の年月住んでゐたと思はれてゐたと推察される。

右に見える長範の馬盗みについては、舞曲の「烏帽子折」に、長範が自分の生立を

七歳の年岡の郷といふ所にて、伯父の馬を奈良井・飯田の市にて賣りたるに、ちっとも仔細が候はず。それよりも盗みは資本もいらず、よき商ひと思ひ定め、日本六十六ケ國を走り廻って盗みをするに、一度も不覺をかゝず（原文假名ガ多ク讀ミ難イノデ、漢字ニ改メタガ、モシカシタラ改メ損ジモアルデアラウ）

とあるから、馬盗人で本職であらうし、當時は馬が最價値のある盗物ででもあつたのであらう。因みにこの奈良井は木曾街道の、今信濃國（長野縣）西筑摩郡のそれで、飯田は同國下伊那郡の三州街道筋の飯田のことであらう。

例の「牛馬問」卷三には、義經が熊坂を切つたのは山中の里（岐阜縣不破郡、赤坂から四里ばかり西）だといふ説を載せて居る。

山中の里と云ふ所に、常盤御前の古墳有り。少し行くに（東へデアラウ）黑血が橋あり、橋より左に當つて本陣屋しき跡有り是むかし義經、熊坂を討ちたる所といふ。土人が曰く、義經盗等を切つて庭池に滿つ。その池水、血に染みて流れ下る故に、黑血川、黑血が橋の名有り。池の所今に存すといふ。

とある。いかに熊坂大盗たりとはいへ、山中の里で切殺され、また青墓で、赤坂でと、さう度々切殺されてはやりきれないであらう。

この黑血川の名義は源平盛衰記には壬申の亂の時の合戰のためだと記してゐるが、天武紀に合はないから疑はしいとは吉田東伍博士の説である。山中の常盤の墓は、「岐蘇路記」に、

關が原と今洲の宿の間に、山中の里あり。源義經の母常盤の墓有り、道の北森ある所なり。

とあり、「木曾路名所圖會」卷二には、

今須の東山中村の北側民家の傍にあり、ここに石塔婆三基あり。其從者の塚ならんか。一說に常盤駿河守が墓ともいふ。

とあつて畫が出てゐる。黑血橋も見えてゐる。駿河守の墓といふのが眞であらうが、常盤の名から世人に馴染の深い常盤御前の墓と化し、墓があるからといふので、常盤御前が京を逃れ出て、此地で盜賊に殺されたとの俗傳が生じ、遂にその子義經の黑血川の傳說を生んだのであらうと思はれる。名所舊蹟の多くは大概かうしたものが多いものである。